

ふるさと探訪

(18)

だった物価水準から考えると、自動車というものは一般市民にとって高根の花だったことも想像できる。

綾部の公道で自動車が走り出したのは大正時代中期。綾部市史によると、大正七年に郡是製糸の社長が

「自動車は砂塵(じん)を飛ばし、泥水をはねつっ

大正から昭和初期にかけて「税金低廉(れん)」「丹波毎日新聞」という「経費僅(きん)少」を特

疾走して、行く人を悩まし、沿道の人家を悩ます事

いた。新聞発行を手がけていたのは、自ら詩や小説も執筆したほか、綾部での俳句や短歌といった文芸活動の振興に力を注いだ飯田兼治郎氏(故人)。

又尠(すく)ならず。殊(こと)に気の毒の感に堪へざるは、晴天打続く春夏の候、沿道の人家は濛々(もうもう)たる土煙に終日、表戸を閉じたるものあり

大正から昭和初期の「自動車」

悩みは土煙や泥はね

綾部の登録数 大正15年は計17台

当時、月額五十銭で販売されていた同新聞の昭和十一年三月七日付の紙面には

乗用車として購入したほか、物部と上林のそれぞれで自動車運行会社が設立されたこと

次のような広告が掲載されている。

大正十五年に綾部で登録された自動車の数は、乗用車が十三台、貨物車が四台の計十七台。自動車文化の幕開けとなるこの時期

「お得意廻りに、配達にダットサン小型自動車」

現在、舗装がされていないなど道路事情が悪かったことを垣間見ることができ

「無免許運転」「車庫不円、コーヒー一杯十五銭

現在の事故多発とは雲泥の差

お得意廻りに、配達にダットサン小型自動車

無試験免許
車庫不円
税金低廉
経費僅少
廉價見切



永井商會小型自動車部

「丹波毎日新聞」の昭和11年3月7日付に掲載された自動車販売の営業広告

超える十一人に達した。人身事故は百五十八件あり、負傷者は百八十二人。人身事故の約四分の一は六十五歳以上の高齢者がかかわる事故で、府内全体で高齢者が事故に遭遇する割合の平均が四、五%であることと比べてみると、高率になっている。また、ちよつと間違えれば人身事故になる可能性がある物損事故も千二十三件発生し、前年より百十八件増加した。

平成六年三月末現在で、市内で登録されている自動車数(大型特殊や小型二輪なども含む)は二万四千五百三十三台。約七十年前の大正十五年(十七台)とは比較にならない数である。生活必需品の一つとなった今、自動車についても一度、考えを改める時期にきているのかもしれない。(細見)